

## 「浄瑠璃寺・岩船寺の紅葉と石仏めぐり」

11月20日(水)、天候にも恵まれて午前10時に近鉄奈良駅前の行基菩薩像前に10名の参加者が集合、10時11分発の浄瑠璃寺行急行バスに乗車して約25分で浄瑠璃寺前に到着。続いてコミュニティバスに乗り換えて約8分間で岩船寺前に到着しました。今回は登り坂を避けて歩行距離も減らすために岩船寺からスタートする事にしました。

最初の岩船寺では、紅葉の真っ盛りのため駐車場には観光バス数台が止まっており多数の観光客が来られていました。山門に入る手前の参道脇に僧侶が身を清めたという石風呂があり、岩船寺の寺名の由来とされているが定かではない。本堂は参拝客で混雑しているために最初は寺の後方にある貝吹山の頂上に向かいました。ここに畳一畳ほどの大きな岩があり「貝吹岩」とよばれ、39ヶ所の坊舎があった頃は法要等の際に僧侶を呼び集めるために「法螺貝」を吹いたと伝わっています。この日は天候も良く、この場所から遠く南山城一带の風景をはっきりと見る事ができました。

続いて山を下り2003年に修理が終わっている室町時代(1442年/重文)の「三重塔」前で記念写真を撮影。残念ながら来迎壁の正面に十六羅漢図、背面に五大明王像、来迎柱には昇龍と降龍、扉の脇の板壁には真言八祖像などがありますが、公開されていませんでした。この三重塔は興福寺の三重塔と同様に心柱は2階の床下までしかない形式で、初層を広く有効に使う形式をとっています。

次は本堂前にある「十三重石塔」(鎌倉時代/重文)です。初重の軸石の4面には金剛界四仏の梵字が薬研彫で刻まれています。北は阿克(不空成就如来)、南はタラク(宝生如来)、東はウン(阿閼如来)、西はキリーク(阿弥陀如来または観自在王如来)で、中央の塔身自体を大日如来に見立てています。昭和18年に軸石のくぼみの中から水晶五輪舎利塔が発見されています。

ようやく、昭和63年(1988年)に再建された本堂に入りましたが多数の観光客が列をなし大混雑していました。本尊は木造の阿弥陀如来坐像(檜の一木造/重文)で像高285cmもあり、胎内に946年(天慶9年)銘が残る。また須弥壇の四隅には鎌倉時代(1293)の銘が残る木造多聞天を含む四天王像があり、本尊脇に普賢菩薩騎象像(平安時代/重文)が厨子の中に安置されている。元は三重塔内に納められていたと伝わっています。修理のために取り外した三重塔の四隅の垂木を支えるユーモラスな木彫の「隅鬼」も展示されていましたが、観光客が多くて立ち止れないので説明できないほどの混雑でした。最後は本堂を出て山門横にある高さ2m余りの五輪石塔(鎌倉時代/重文)を見ました。

寺伝では東大寺別当 平智僧都の墓と伝えられ、昭和初期に岩船の北谷墓地から当地に移された。地輪下に返花坐がある、これは「大和式」と呼ばれる五輪塔の様式で、ここ南山城から大和地方にかけての特徴で、この五輪塔はその代表的な例です。

山門を出てトイレ休憩の後、岩船寺から浄瑠璃寺に向けて石仏の道を歩きました。浄瑠璃寺に向けて山道を下ると右側の谷間の崖下に「不動明王磨崖仏」があります。手すりにつかまり階段を降りると弘安10年(1287年)岩船寺の僧某が造ったと銘にある。苔に覆われてよく見えないのですが両眼をカッと見開いた憤怒の相、左手に羂索、右手に剣を持つ。願い事を一つだけ一心に祈れば叶えてもらえるという「一願不動さん」としても知られています。

階段を登り元の山道に戻り、急な下り坂を手摺を持ちながら注意して歩き終わると三叉路があり、左折すると当尾の里で最も知られている石仏の1つで、優しいほほ笑みをたたえた「阿弥陀三尊磨崖仏像」、通称「わらい仏」を見ていただきました。向かって左側に合掌した勢至観音、右側に蓮台を持つ観音菩薩の脇侍を従え、上部の石が底となっているため風蝕もなく美しい石造仏です。大工末行(有名な石工/伊行末の子孫)の銘があります。また、わらい仏に向かって左側の地面の中に半身が土に埋もれて、右手に錫杖を持った「眠り仏(埋もれ地蔵)」があります。現在は首まで土の中に埋もれてしまい、かろうじてお顔だけを拝見できました。

次は古くからの分岐点で「からすのつぼ」と呼ばれている所で、1つの四角い岩の正面に阿弥陀如来像と側面に地蔵菩薩が彫られているので「カラスの壺二尊像」と呼ばれています。このような1つの岩に阿弥陀(来世の救済)と地蔵(現世の救済)をまつる双仏像は後に多数造られていきます。この阿弥陀の横には線彫燈籠があり、火袋の横に彫り込みを作り、そこに灯明を供えることができる珍しいものです。この付近に黄色の実をつけたカナリヤナス(別名:フォックスフェイス)の無人販売小屋があり、皆さん興味深くご覧になり、購入された方もありました。観賞用のナスで名前は河合様から教えていただきました。

石仏の道の最後は、「藪の中三仏磨崖仏」です。左側にある1つの岩に阿弥陀仏坐像、右側のあるもう一つの岩に地蔵菩薩と、やや小さく観音菩薩が彫られています。銘文で弘長2年(1263年/鎌倉時代)に制作されており、東小田原寺の塔頭西谷浄土院と読めることから、これらの磨崖仏は多くは塔頭本尊の性格を持っていたと云われています。ここから少し歩くと浄瑠璃寺(別名:九体寺)です。

昼食場所は浄瑠璃寺門前の「あ志び乃店」です。ここも観光客が多くて店内は大混雑していましたが、何とか分散して着席して、各自のお好きな物を注文していただきました。そして昼食後は、浄瑠璃寺の拝観です。

当日は浄瑠璃寺付近の紅葉の具合が心配されましたが、ほぼピーク時に近い状態で美しい景色を見る事が出来ました。この寺の創生については不明な点が多く、最初は東方浄瑠璃世界の教主である薬師如来像(重文)を永承2年(1047年)に創建の際に池の東側の三重塔(国宝)内の本尊として安置したことから浄瑠璃寺と呼ばれようです。塔は京都の一条大宮から移築されたもので平安朝の優美な姿が木立の中に映えて見えます。

嘉承2年(1107年)本堂である阿弥陀堂(国宝)が建立され、九体の阿弥陀如来像を安置。その後、興福寺一乗院の僧、恵心が宝地を作り庭園の大整備を行い、その西岸に阿弥陀堂を移築。これ以来、一乗院の祈願所となり、興福寺との深い関係が続く事になります。

九体の阿弥陀仏を一行に並べて安置する形式は、藤原道長の法成寺無量寿院から始まり、白河天皇の法勝寺などが記録に見えます。平安後期の末法思想の広がりと共に流行しましたが、現存するのはこの浄瑠璃寺の一棟だけになり大変貴重な存在です。

太陽は三重塔がある東から昇り、宝地を渡って阿弥陀堂のある西に沈む。東の薬師(過去世/遣送の如来)、西の阿弥陀(未来世/来迎の如来)。つまり、薬師如来は病気などの現世の苦悩を救い、西方浄土に向けて送り出してくれる仏、それを迎えるのが阿弥陀で、人々の理想郷である極楽に往生させてくれる仏です。因みに、この中央(薬師とあだの間)に、現世の救済のために現世に出現された釈迦仏(現世/遣送の如来)を祀るといなのが、「三世三仏の思想」です。

本堂(阿弥陀堂)は平安時代の建物で国宝。堂内の九体の阿弥陀如来像も全て国宝(平安時代)。中尊が来迎印を結ぶ周丈六の坐像(像高221cm)で木造漆箔。左右に四体ずつ半丈六の坐像が横一列に定印を結んで並んでいます。順次修理される予定のため一部を除き丁度良いタイミングで修理前の状態を見る事ができました。

本堂の入口を入った所に持国天像と増長天像(平安/国宝、木造彩色、像高169cm)の四天王像の2体のみ安置されています。暗くて分かりにくいですが、鎧を着て武器を持つ忿怒像ながら、激しさはあまり強調せずに動きもゆったりしています。

秘仏の吉祥天立像(鎌倉/重文、木造彩色、像高90cm)も公開されており、見る事が出来ました。前年の罪障を懺悔して、新年の幸福を祈る吉祥悔過会の本尊とされ、建暦2年(1212年)に造像されとみられ、唐美人を思わせる魅力的な像で、衣は纒縵彩色による美しい彩色で飾られています。

本尊に向かって右横でひっそりと立つ子安地藏菩薩立像(藤原時代/重文、木造彩色、

像高 157cm)。顔が丸く、体つきもなだらかな和様像で、拝する人々に安心感を与えています。衲衣の内側、胸の下にのぞく結び紐は下半身を覆う裙の上端で、まるで腹帯のように見える事から安産の守り本尊とされていたようです。

本堂の出口付近に不動明王・二童子立像(鎌倉/重文、木造彩色、像高 99.5cm)が安置されています。この不動明王像は、鎌倉時代(1311年)に建立された護摩堂の本尊であったが、今はこの本堂内に設置されています。やんちゃな制多迦(像高 51.5cm)、おとなしい矜羯羅(51.0cm)の二童子を従えて、玉眼を光らせて立つ姿は迫力がありました。本堂の拝観が終わった後、本堂前の石灯籠(南北朝/重文)の横で記念写真を撮影しました。石灯籠は本堂前と三重塔前に二基の六角石燈籠があり、いずれも南北朝時代のもので、重文に指定されています。三重塔前の石灯籠の火袋の下に彫刻があり、竿の部分に貞治5年(1366年)の銘が刻まれています。

最後に特別名勝および史蹟に指定されている浄瑠璃寺庭園の周りを、ゆっくりと紅葉を楽しみながら巡り、その後、浄瑠璃寺前から奈良行きの急行バスで無事に近鉄奈良駅/JR奈良駅に戻りました。

参加者名(敬称略)：今中栄一、河合正之、杉 美知男、瀬並和弘、西野信夫、  
深田 道、村田秀郎、村橋洋三、山田修實、天羽将恵



■ 浄瑠璃寺 本堂前 (石灯籠と特別名勝庭園&史蹟、背景に国宝の三重塔)



